

第8回学術大会特別講演

口腔ケアと生活習慣病・感染症の関係

花田 信弘

鶴見大学歯学部 探索歯学講座

戦国時代の武将（織田信長）が好んだ舞の詩のように人生は50年が限界だと信じられていた。「この世（人間界）の五十年など夢幻のように一瞬のもの、滅びぬ者などいない：（人間五十年 化天の内をくらぶれば 夢幻のごとくなり）」（幸若舞）。しかし、今では結核・感染症対策を中心に環境衛生、栄養、医療の向上が進み、日本人の平均寿命は女性86歳、男性79歳に達するにまで至った。寿命の延長が可能になった要因は複合的であり単一の要素によるものではないが、栄養の向上が結核の克服の一つの要因であることは衛生学の定説となっている。しかし、過剰なカロリー摂取はメタボリックシンドロームを招くので、バランスがよい栄養食が大切である。適正な栄養バランスを支えるために歯の健康が必要なので「噛ミング30（カミングサンマル：よい歯で一口30回噛む運動）」が提唱されている。また、平成17年の歯科疾患実態調査の結果では一日に2回以上歯を磨く人の割合は70.4%に達し、口腔において病原微生物が異常増殖することによる健康障害が少なくなったことも日本人の長寿に貢献したと考えられる。さらに半世紀前からの国民皆保険制度の導入によって国民全員が保険で安い治療を受けることが可能となっ

たことも我が国の特徴である。しかも、我が国の国民皆保険制度では、歯の欠損補綴の治療も保険でカバーされているため、歯を失ってもブリッジや義歯で口腔機能を維持することができる。このような制度は我が国の歯科医療の誇るべき特徴であり、高齢になっても高齢者全員が噛むことができることは日本人の平均寿命の延伸に貢献したと思われる。しかし、その因果関係を科学的に証明することは容易ではない。

チンパンジーはヒトと遺伝子が98.8%の相同性をもつにも関わらず、その寿命は丁寧に管理されている住居施設において生活していても人間よりはるかに短い（40～50歳程度）。チンパンジーは口腔ケアを知らず一度も歯を磨いていないヒトのモデルと考えられる。人間がもし口腔ケアを軽んじれば、チンパンジーの寿命と同じレベルに逆戻りするかもしれない。本講演では、厚生労働科学研究「口腔と全身の関係」の研究成果を中心に口腔ケアによるメタボリックシンドロームの予防、口腔ケアによるがんの予防、口腔ケアによる市中肺炎・インフルエンザの予防など口腔ケアが全身の健康に及ぼす影響を紹介し、その影響の推定メカニズムを解説する。